

〈報告〉

北海道警察「自画撮り被害」啓発用動画の制作

短編動画『ネット被害にあってない?』制作プロジェクトの報告

島田英二*

Report on *Internet Crime Trouble*, a Short Film Commissioned by
Hokkaido Prefectural Police to Warn about the Risk of Selfie Leaks

Eiji SHIMADA

要旨

本稿は、2019（令和元）年11月から2020（令和2）年5月にかけて、北海道警察の依頼により北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科の映像表現系ゼミナール（島田ゼミ）において制作した「自画撮り被害」啓発用動画『ネット被害にあってない?』（2020）制作プロジェクトについて報告する。本稿では企画、準備、撮影、編集といった映像制作のワークフローに従い、作品が完成するまでの過程とプロジェクトの成果について主に記載した。本プロジェクトはボランティアで行われ、作品の完成後、本学は北海道警察より感謝状を贈呈された。

Abstract

This paper reports on the production of the short film, *Internet Crime Trouble?* (2020), produced by Shimada Seminar in the Faculty of Information Media at Hokkaido Information University (HIU) from November 2019 to May 2020. This film, commissioned by the Hokkaido Prefectural Police, aims to warn about the risk of a selfie leaks. In this paper the following topics are discussed: planning, pre-production, shooting, and editing, according to the workflow of filmmaking. This project was conducted by volunteer students and staff. After the completion of the film, HIU received a certificate of appreciation by the Hokkaido Prefectural Police.

キーワード

映像制作 (film production) 短編動画 (short film) 演出 (direction) 自画撮り (selfie)
インターネット犯罪 (internet crime) SNS

* 北海道情報大学情報メディア学部 准教授, Associate Professor, Department of Information Media, HIU

資料によると、近年 SNS (LINE, twitter, Facebook, スマートフォンのマッチング系アプリおよび出会い系サイト) を使った被害少年の数が急増しており、北海道では 2016 (平成 28) 年に 72 名だったものが 2017 (平成 29) 年には 107 人となり、2019 (令和元) 年 9 月の統計 (オリエンテーションの時点) ではすでに前年を超える 101 名が報告されており、3 年連続で 100 名を超える現状にあるということであった。このうち自画撮り被害の事例では、犯人は“おじさん” (中高年の男性) であることが多く、名前や年齢、性別を偽って未成年に近づき画像を撮らせる具体的な手口や、被害にあった方が (北海道の場合) ほとんどフィルタリング設定をしていないという事実も紹介された。今回制作する動画は札幌市内のデジタルサイネージ等とインターネット上でも公開する。ターゲットとしてできれば保護者のような大人だけでなく、子どもたちにも見てもらい、「危ないんだな」という意識を持ってもらいたいという思いを共有した。質疑応答では、改めて制作費についてや、交番の中で撮影することが可能か、動画に入れてほしいキャッチコピーなど指定の言葉があるか等の質問があった。

3-2 リサーチ

リサーチではまず過去に北星学園大学と北海道警察のプロジェクトとして制作された短編映画である『綻び』 (北星学園大学映画研究会 2019) を参照した。この作品は女子高校生が自画撮り被害に遭う物語で、13 分 38 秒の短編ドラマとして作られている。この作品では、被害に遭うまでの過程や悩み、恐怖、両親の登場や北海道警察のサポートセンターの紹介など、ドラマ作品として丁寧に制作されている (逆に言えば、同様の作品を企画すると重複すると考えられた)。啓発のメッセージをコミカルな表現で伝える例として、劇場内

での映画の撮影・録音を防止する『NO MORE 映画泥棒』 (シネマトゥディ 2019) を例に上げて研究した。この作品では犯人をビデオカメラとしてキャラクター化し、ダンスを取り入れることで堅苦しくないポップなスタイルで啓発を行っている。この他、東京都や愛知県警察が制作した自画撮り被害防止の動画なども参照した。また、啓発や防犯を行う主体がどのような統計とメッセージを発信しているかについて、政府、警察庁、北海道警察といった組織の Web サイトを参照した。特に政府広報オンラインは対象を年代別で具体的に設定し、イラスト付きで図もわかりやすくまとめられており基礎資料として参考になった。ここでは、「あなたのお子さんは大丈夫?」「性被害から子供を守る」 (政府広報オンライン 2019) など、保護者目線の見出しも多く、こうした Web サイトを閲覧するのは大人が多いことも考えられた。これらを参考に、大人だけでなく子どもたちをターゲットとした企画とするにはどうしたらよいか、アイデアを考えていった。

自画撮り被害においては、「被害者が、なぜ画像を送ってしまうのか?」という点についても学ぶ必要があった。PRESIDENT ONLINE の記事によれば、「次の 3 つの問題点が複雑に絡み合っていると思われる」 (鳥居りんこ 2020) という。

1. 嫌われたくない症候群
2. 性への興味と注目されたいという思春期独特の思考
3. 承認欲求

例えば 1 の事例では、中 3 女子の被害の事例が挙げられている。この例では、犯人 (男) は A 子 (中 3) の女友達になりすまし、「私 (成りすまし男) は A 子のこと親友だと思って、誰にも言えない秘密を送ったのに、A 子は私のこと親友とは思ってなかったんだね……」と言って画像を要求した。ここでは A 子が教

室の中での人間関係のように、「嫌われないようにふるまう」ということが被害に遭ってしまう原因となっている。またこの他にも、異性からの「パワハラ」（例えば「愛しているなら、できるはず」という脅し）を受けた場合にも、断ることが難しくなるケースが紹介されている。被害者がどのような心理状況で事件に巻き込まれていくのか知ることで、映像の演出や演技指導にとって貴重なリサーチとなった。

この他、企業の取り組みとして、2018年2月にNTTドコモと朝日新聞社が自撮り被害の実態を啓発する動画を制作した事例を研究した。この動画は1分55秒の長さで縦長の構図である。内容は、主にスマートフォンのチャット画面における会話（文字）と音声で展開するもので、主人公の女子高校生が「悪意のある大人によって迫られていく様子が非常に生々しく」（井口裕右 2018）、ショックを与えるように表現されている。制作年度は2018年であるようだが、公開から約2ヶ月で150万回以上再生されたという²⁾。

3-3 プレゼンテーション

オリエンテーションから約3週間後、プレゼンテーションを行った（写真2）。約30のアイデアから絞り込まれた10案について事前に内部コンペを行い、最終的に残った5案を北海道警察の担当者に発表した（写真3）。①「実写とグラフィカルなUI」は、白い空間で女子高校生がSNSをしており、その空間に福祉犯罪や詐欺犯罪についての警告文字がモーショングラフィックスとして動き出し、驚くという作品である。②「えっちなおじさん図鑑」は、一人のおじさんが「清楚・20代・小学生」など様々な属性の人物に“擬態”するというアイデアで、「あなたのSNSの友達



写真2 第1回プレゼンテーション

の正体が誰かはわからない」と訴える案である（この案に“カメレオンおじさん”という言葉が登場する）。③「ドラマ風 啓発『女子高生』」は、SNSを使った”パパ活”（金銭的に支援してくれる異性との交際）を行うことの危険性を、複数の女子高校生のテンポよい会話で注意する案である。④「コメディ寄りな、なりすまし啓発」は、自撮り被害にフォーカスする作品で、なりすましのおじさんが登場する案である。⑤「女子高生が煽る」は、4人の女子高校生が自撮り画像をSNSにアップロードする瞬間に時間が一時停止して、生徒の一人が危険性を指摘する。5つの案はいずれも好評で、実制作も考えながらチームの中で絞っていったほしいという結論となった。

コメディ寄りな、なりすまし啓発（ストーリー）

女子高校生がベットの上で自撮りをとっている（その画面をキャプチャーしている映像）
女子高生が（引いた全身が見える絵で）自撮りをしている。
女子高生のその姿が突如代わり、同じ制服を着たおじさんが自撮りをしている。（同ポジ）
カメラ目線でこちらを見るおじさん
「騙すなんて簡単だよ」
NA「北海道警察」

写真3 プレゼンテーション資料（案④）

3-4 ブラッシュアップ

第1回のプレゼンテーションから案を絞るため、アドバイスとしてまず5つの企画案の

²⁾ 2020年12月現在、記事のWebサイトおよびリンク先から動画は削除されている。

中から方向性を抽出した。それらは、A. 第三者的な立場から啓発 (①), B. なりすまし (②④), C. 同世代からの注意 (③⑤) の3つである。そして、完成品のアウトプット先が大型ビジョンであることから、できるだけ音声やテキスト情報でなく、極力ビジュアルで伝えられるようにブラッシュアップしていくよう助言した。たとえばCの方向性では同世代から注意を行うが、注意する女子高校生を警察官に置き換えることができれば、視覚で防犯のメッセージを伝えることができる。また映像の終わりに「こうした方がいい、これをしてはいけない」というメッセージがあった方がよいのではないかということも指摘した。たとえば「フィルタリングをかけましょう」「個人情報の投稿はやめましょう」といった終わり方をする事で伝えたいことが明確になる。またこの時点で、作品の長さを15秒にしてはどうかと提案した。デジタルサイネージの放送尺と揃えることで納品物が1つになりポストプロダクション作業(編集)がシンプルになるほか、結果として企画も短くシンプルなものにできる。2回目のプレゼンテーション(写真4)では、技術的な理由からAが後退し、BとCの案が融合するような形で2案に集約されていった。この段階では絵コンテを用意した(写真5, 6)。



写真4 第2回プレゼンテーション

No. 1				
S/C	画面 / 絵 PICTURE	内容 ACTION	セリフ / 音 DIALOGUE & SOUND	時間 TIME
シーン 1 カット 1		女子高校生3人が自撮りしようとしている	JK1 「入って行ってJK1 「行くよ?」	1s +
シーン 1 カット 2		という掛け声共に、時間停止女子高校生たちの動きがとまる	JK1 「ハイッチ…」	1s +
シーン 1 カット 2		男性警察官が上手からフレームイン	警察官 「SNSを利用した犯罪が増えています」	1s +
シーン 2 カット 1		怪しい男性がSNSに上がった女子高生達の写真を見ている	警察官 「あなたの写真」	1s +
シーン 2 カット 2		にやにやと笑う怪しい男性	警察官 「から個人情報」	1s +
シーン 2 カット 3		高卒のクローズアップ	警察官 「がつゆかけられません」	1s +
絵コンテ用紙 (16:9画角) 提供: ハイトリックスター http://www.hyt.com/ 合計時間 (+)				

写真5 絵コンテ (時間停止篇, 抜粋)

No. 1				
S/C	画面 / 絵 PICTURE	内容 ACTION	セリフ / 音 DIALOGUE & SOUND	時間 TIME
シーン 1 カット 1		ベッドの上で制服を着て寝ている女子高生がスマホを見ている		1s +
シーン 1 カット 2		スマホのクローズアップ「嫌の写真送ってよ」イクメンのアイコン		1.5s +
シーン 1 カット 3		女子高生のスカート揺らめく		1.4s +
シーン 1 カット 3		スカートをめくろうと手を振る		1.6s +
シーン 1 カット 3		スカートをめくろうとしている		1.7s +
シーン 1 カット 3		警察官がフレームイン	警察官 「SNSを利用した犯罪が増えています」	3.3s +
絵コンテ用紙 (16:9画角) 提供: ハイトリックスター http://www.hyt.com/ 合計時間 (+)				

写真6 絵コンテ (自画撮り被害篇, 抜粋)

「時間停止篇」・「自画撮り被害篇」の両方に、

警察官が登場するようになっていくほか、アイデアとして、登場人物の生活の中に時間や空間を超えて忠告者が割り込んでくる構成となっている。

この2案から、最終的に「自画撮り被害篇」が採用された。選考では、「時間停止」案のロケーションである教室が確保できるか、出演者の人数や衣装（制服）の準備といった現実的な面が考慮された。ブラッシュアップの段階では警察からのフィードバックも随時反映していった。たとえば、啓発の内容の締めを、「SNS利用に起因する犯罪からの被害防止」から一歩踏み込み、特に問題となっている児童ポルノなどの「子どもの性被害防止」に焦点を当てられないかという意見などがあつた。

4. プリプロダクション

撮影準備について、「自画撮り被害篇」ロケーションが一箇所となったため、ここではプレビズとキャスティングについて記載する。

4-1 プレビズ

カット割りやテンポ感、表現方法、美術の検討のため、絵コンテをもとにプレビズの動画を制作した（写真7）。ファーストカットではベッドの高さに対してのカメラ高さの設定や、背景の本棚の計画（TV画面内）が確認できる。この企画では突然、主人公の部屋に警察官が現れるが、ここでは警察官役をスタッフが演じ効果音とのタイミングを検討している。また、犯人が偽のサムネイル画像を使ってなりすましをしている”カメレオンおじさん”のアイデアも取り込まれている。

4-2 キャスティング

本件は制作費を持っていないためボランティアでの出演者募集を行うこととなった。女子高校生役が重要であったが、自画撮り被害

に遭いそうになり助けられる危ないシーンについては、演出意図を正しく説明していく必要があつた。募集は知人の紹介やインターネットを使って行い、複数の応募から書類選考を行い、最終的に監督が決定した。結果は現役高校生（撮影当時）の方となり、未成年のキャスティングとなったため、保護者に面会してプロジェクトの背景と演出意図の説明を行った。犯人役と警察官役は北海道警察の現職警察官の方に出演をお願いした。



写真7 プレビズ（右）と絵コンテ（左）

5. 撮影

撮影は2020年の2月16日（日）に行った。スタッフ宅に女子高校生の部屋と犯人のデスクのセットを作り撮影した。元々は男性の部屋であり、女性の部屋らしさを出すため面積

の大きい家具であるベッドについてベッドカバーをピンク色とし、カーテンはオレンジ色の入ったものとする事で画面を暖色に設計した(写真8)。登場人物の衣装が紺系の制服であるため背景とのコントラストが出るよ



写真8 女子高校生の部屋のセット



写真9 犯人の部屋のセット



写真10 スタッフ・キャスト集合写真

うになっている。一方、犯人の部屋は閉じこもったサイバー犯罪の感じを出すため青色の背景照明と黒のパソコン画面とし寒色の色彩設計とした(写真9)。演出では、女子高校生が性犯罪に巻き込まれそうな危うい雰囲気撮れるように表情や動作に気をつけた。撮影当日はキャスト3名、スタッフ11名の計14名で行った(写真10)。このうち1名はヘアメイクの担当でビューティーアート専門学校の学生がボランティアで参加してくれた。

6. 編集

2020年2月28日(金)に北海道知事が緊急事態宣言を発令したこともあり、編集作業とチェックはリモートで行うこととした。

YouTube を使用して公開設定を限定公開とし、仮編集のビデオを共有することで、集まることなく確認と修正作業を行った。合成はAfter Effects を使用して文字やグラフィックとモーションを加えた(写真11)。パトランプの光の演出は撮影時にバッテリーライトに赤色のフィルタを巻いて照明を動かしている。

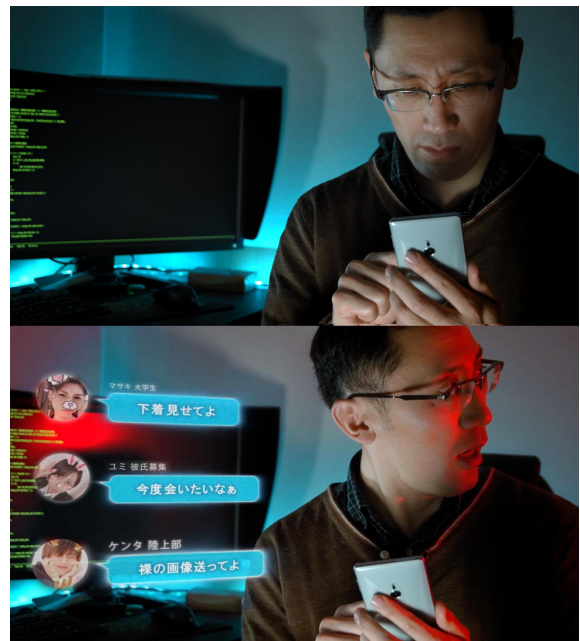


写真11 合成前(上)と合成後(下)

ラストカットはプレビズから変更となり、複数の素材パターンを撮影したが、最終的には画面左に文字を置く構図とした（写真12）。



写真12 合成前（上）と合成後（下）

音楽は Artlist からイメージに合うものを選曲し、15秒の中に展開がある構成とした。他に編集では、手持ちカメラの揺れの演出の追加や、速度調整によるスピードランプ効果と、サウンドとのシンクロを行っている。オンライン編集後にはカラーグレーディングを行い、全体的なコントラストの調整やスキントーンの調整を行った。

7. 作品情報

作品タイトル：ネット被害にあってない？

作品長さ：15秒

納品仕様：FHD/16:9/23.976fps/ProRes422HQ
(撮影：4K/16:9/59.94fps/braw)

配信リンク：<https://youtu.be/4DQypZDZNPg>

8. 使用機材

本プロジェクトでは以下の機材を使用した。

(撮影機材)

- Blackmagic Pocket Cinema Camera 4K
- (ソフトウェア)
- Adobe Premiere Pro
- Adobe After Effects
- Adobe Photoshop
- DaVinci Resolove 16

9. 公開

完成作品は2020（令和2）年6月25日にYouTubeの北海道警察公式チャンネルで公開された。同年12月1日の時点で1,377回の視聴数がある。その他、同年7月1日から以下の場所で公開されている（表1）。

表1 動画の放送期間と場所

期間	種類
1ヶ月間	○1時間に2～3回程度 ・札幌運転免許試験場モニター ・ススキノメガビジョン（中央区南7条西3丁目）ほか ・SABRO.TV（駅前通と国道36号の交差点） ・HIROSHI（地下鉄大通駅南改札口前）
	○朝夕通勤時間帯のみ、1時間に3回程度 ・地下歩行空間ビジョン
	○1時間に1～2回程度 ・札幌パルコビジョン ・狸小路商店街ビジョン
1年間	・北海道警察本部1階ロビー ・Hokkai・Do・画（北海道庁インターネット放送局）（Youtubeにリンク）
期間なし	北海道警察が保有する広報用Twitterアカウント上

公開にあたってはトラブルが発生しないよう

事前に出演者と北海道警察本部の間で同意書を作成し記名押印した。第三者が自由に感想を書き込める YouTube のコメント機能については、出演者保護の観点からオフとする取り決めとした。動画の利用については本学（代表筆者）と同本部でも同意書を交わしている。

10. ニュースリリース, 掲載

作品の完成・公開にあたり、北海道警察および本学からニュースリリースを発表した。リリースの結果、以下のメディアに掲載された（表2）。

表2 メディア露出

種類	詳細
テレビ	<ul style="list-style-type: none"> ・6月27日北海道テレビ (HTB) イチモニ (写真13) ・6月27日札幌テレビ放送 (STV) どさんこワイド (写真14)
新聞	<ul style="list-style-type: none"> ・7月3日 (金) 北海道新聞 (江別版) (写真15) ・大學新聞
オウンドメディア	<ul style="list-style-type: none"> ・北海道情報大学 WEB サイト ・EDC ビル電光掲示板



写真13 北海道テレビ (HTB) イチモニ



写真14 札幌テレビ放送 (STV) どさんこワイド



写真15 北海道新聞 (江別版)

11. スタッフレジット

本プロジェクトのスタッフレジットは以下の通りである（表3）。

表3 スタッフレジット（括弧内は制作当時の学年）

種類	詳細
出演	小黑愛, 飯塚進也, 石崎隆之
プロデューサー	小俣一希 (3)
エグゼクティブ・プロデューサー	島田英二
監督	小俣一希 (3)
助監督	酒井幸穂 (3), 武内奈緒子 (2)
撮影	木村洸 (2), 三好健太 (2)
照明	成田琉夢 (1), 安藤翼 (2)
録音	宇野裕貴 (2)
制作・美術	竹田花菜シェルパ (3)
編集・カラー	小俣一希 (3)
ヘアメイク	村田静音 (札幌ビューティーアート専門学校)
画像協力	野澤祐聖 (3), 酒井幸穂 (3), 川内谷快人 (3)

12. 感謝状

本プロジェクトの遂行に当たり、映像制作を担当した北海道情報大学、および出演者へ



写真16 感謝状贈呈式

北海道警察から感謝状が贈呈された。本学では2020（令和2）年8月6日に贈呈式が行われ、監督を務めた小俣一希がチームを代表して受け取った（写真16,17,18）。



写真17 感謝状贈呈式集合写真



写真18 感謝状

13. おわりに

本プロジェクトは北海道警察と北海道情報大学の初めての共同映像制作プロジェクトとなった。制作費がなくボランティアの条件でのプロジェクトであったが、有志の参加に恵まれ一定の品質の作品を作り上げ、様々な場所へ露出されるなど有意義な結果となった。特に感謝状をいただくような経験は参加した学生メンバーにとっては貴重な経験であり、大学で学んだ知識や技術で社会に貢献できることを実感し大きな自信につながった

う。本プロジェクトには、映像の授業を受けすでにスキルのある3年生だけでなく、まだ映像の専門科目が始まっていない1年生の参加もあったことが印象的であった。部活に声かけできたことで幅広い学年に情報が届いたことも大きい。北海道警察とコラボレーションできる貴重な機会ということも参加理由になったのではないかと推測している。

このように本プロジェクトは短期間ながら学習効果と達成感の高い結果となり、改めて産学官等連携プロジェクトの意義について考えさせられた。映像制作で社会に貢献できるこのような機会があればまた積極的に取り組んでいきたい。本件はアサインした動画制作の実践的なプロジェクトであったが、より正統なプロジェクト学習と位置づけた場合には、成果の測定について目標設定や達成度といったアンケートも行うことが適当であると考えている。今後はそういった調査についても検討していきたい。

最後に、本プロジェクトは撮影とポストプロダクションの時期が北海道の新型コロナウイルスの感染拡大時期（第一波）と重なったが、感染者や体調不良者を出すことなく無事終了できたことは幸運であった。図らずも日頃から映像制作のプロジェクト管理に Google ドライブや YouTube 等、クラウドサービスを利用していたため、リモートでの作業は遅滞なく進めることができた。こういった点は本学の強みであり、今後コロナ禍の状況における映像制作モデルやプロジェクトマネジメントの形を提示できるよう意識して追求して行ってもよいかもしれない。

謝辞

本プロジェクト遂行のため、各方面への問い合わせや連絡・調整等でご尽力いただいた北海道警察本部少年課警部補の石崎隆之氏に深謝いたします。

参考文献

- 井口裕右 (2018) 「女子高生が下着姿を SNS で送信--子どもの“自画撮り被害”を防ぐドコモの取り組み」
<https://japan.cnet.com/article/35116947/>
(2020年2月7日アクセス)。
- シネマトゥデイ (2019) 「NO MORE 映画泥棒」新トレーラー
<https://youtu.be/89U5Sva2qdc> (2019年11月10日アクセス)。
- 政府広報オンライン (2019) 「インターネットの危険から子供を守る」
https://www.gov-online.go.jp/tokusyuu/cu_internet_kodomo/index.html (2019年11月26日アクセス)。
- 鳥居りんこ (2020) 「少女たちに「裸の自撮り」を送らせる騙しの手口」
<https://president.jp/articles/-/32127> (2019年2月7日アクセス)。
- 北星学園大学映画研究会 (2019) 『綻び』(短編映画/13分38秒)

